

中野香織

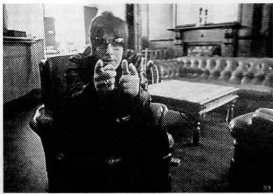
④「様系」とスキヤンダル

ここしばらく、連日の「ベックステイト」報道に目が釘付けでした。ベッカムの不倫スキヤンダル。なんといっても最初のお相手とされるレベッカ・ルースという女がはしゃいで、「その翌朝いちごを食べさせられてくれた」だの事細かに情事の内容をしゃべったあげく、「キル・ビルV.2」のロンドンプレミアにはセレブ気取りで登場とか。もっと信じられないことには、某新聞が読者を対象におこなった「ベッカムとレベッカとヴィクトリア、誰がとがめられるべき？」というアンケート（この問いもすごいけど）では、なんと「妻のヴィクトリアが悪い」という回答が最多なんですよ。妻は夫のスペイン赴任についていくべきだったって。単身赴任のベッカムもかわいそうだし、ベッカム様の誘惑を拒める女などこの世にいない、ということでは張本人たちはそれほど悪く言われない。な〜にこれ？

「様系」スキヤンダルに強し。ということで、様系東の横綱、ヨン様があの手この手の誘惑術で迫る「スキヤンダル」。ラクロの原作はもう永遠のバイブル、果たして十八世紀フランス貴族の恋愛術と韓国映画との相性はいかにと内心ひやひやでしたが、いやもう、これって、ロジェ・ヴァディム

ドーバー
越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

「リヴ・フォーエヴァー」
7月3日よりシネマライズ
にてレイト公開

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。



オブジェ制作=井上陽子

版よりもステイヴン・フリアーズ版よりも激しく感情をゆさぶりませんか？ とりわけメルトイユ侯爵夫人に相当する役のイ・ミスク（あでやか！）を冷酷な悪女として罰しないで、実は心の奥底に初恋の純情を秘めていた女性として描いたのは、情のこまやかな韓国ならでは？ 後味がこんなに甘美な「危険な関係」ははじめてです。

そしてヨン様。「ヨン様のヨン様たる部分は眼鏡と髪型で成立」という敦子説、納得しました。眼鏡とさらさら髪をとり、李王朝時代の帽子とひげをつけたヨン様は、どっちかというところ、ヨン吉（©編集チアキ嬢）。ヨン吉の流し目も悪くないですけど。

その翌日、「リヴ・フォーエヴァー」という90年代の「クール・ブリタニア」チームを検証するドキュメンタリー映画を見ました。プレミアも政治に利用したカルチュアムーブメントが、実はアメリカ的な文化に対する抵抗運動だったという視点は新鮮な驚き。そういえば今の英国人がもてはやす「英国的」というのは「反アメリカ的」とほぼ同義かも。ヴィクトリアがこぞとばかり不当にバッシングされるのも、アメリカ受けを狙ったセレブスタイル（あのプラスチックな胸！）をもちこんだせいでもあるのか、とはっとしました。ヨン様人気を後押ししているのが韓国映画力だとすれば、ヴィクトリア不人気をおおっているのが反アメリカの英国魂……って飛びすぎ？